

## 寺田寅彦と雑誌『鐵塔』

四宮義正

寺田寅彦は『明星』、『改造』、『中央公論』など多くの雑誌に多彩な文章を発表している。中でも小林勇が経営する鐵塔書院が発刊した雑誌『鐵塔』との関係は特別なものがあつた。この雑誌は国会図書館にも所蔵されておらず、なかなか見ることができない。しかし、幸いにも小林勇の長女である小松美沙子さんから、『鐵塔』の全号を収めた CD が友の会に寄贈されているので内容を知ることができる。

### 1. 小林勇と鐵塔書院

小林は 1903 年（明治 36）3 月、長野県上伊那郡赤穂村（現・駒ヶ根市）に生まれ、1920 年（大正 9）4 月、岩波書店に入社している。岩波文庫の創刊に関わったりしていたが、1928 年（昭和 3）3 月、従業員のストライキが発生し解職を要求された。同年 8 月に退社。10 月新興科学社を興し、雑誌『新興科学の旗のもとに』を創刊している。

岩波書店にいた時から寅彦とは親交があつたようで、この雑誌の創刊を聞いた寅彦から小林に宛てた手紙が残っている。

昭和 3 年 10 月 25 日（木）

御手紙難有拝見 いよいよ御出陣の由 芽出度御成効を祈候 少生こそ将来又色々宜敷御願申上候 御閑の節は如旧御来駕願上度祈候 草々

この後、1929 年（昭和 4）4 月に鐵塔書院を設立している。書店の命名を幸田露伴に頼んだところ、鐵塔書屋を提案されたが、ショオクが気に入らず、鐵塔書院とした。

1932 年（昭和 7）10 月に雑誌『鐵塔』を創刊。小林はこの年 9 月に岩波茂雄の次女、小百合と結婚していたため、親子で同業というのは具合が悪いということで、小泉信三、露伴、寅彦などの斡旋で 1934 年（昭和 9）11 月に岩波書店に復帰している。結局、鐵塔書院の経営は 6 年間であつた。

鐵塔書院設立時の二人の年齢を考えると寅彦 50 歳、小林 26 歳であり、息子の世代である。これだけの差がある若い出版人に特別に目をかけていたことは、科学随筆集『萬華鏡』（昭和 4 年 4 月 10 日）を鐵塔書院から出していることからよく分かる。またその続編ともいえる『物質と言葉』（昭和 8 年 10 月 20 日）も同社から出ている。

岩波書店復帰後にも寅彦の随筆集を手掛け、寅彦没後には文字通りの全集（文学篇 16 卷、科学篇 6 卷）を出すと共に『回想の寺田寅彦』（昭和 12 年 9 月 10 日）をまとめたことから考えても、寅彦の人を見る眼に間違いはなく、また小林もその期待に十分に応えたと言える。

## 2. 『鐵塔』への執筆と関連記事

雑誌『鐵塔』を繰って、寅彦の寄稿だけでなく関連記事を含めたリストを作ってみた。

### 雑誌『鐵塔』に掲載された寺田寅彦の随筆及び関連記事

卷	昭和	号	月	筆者(筆名)	表 題	掲載頁		
1	7	1	10		(休み)			
		2	11	吉村冬彦	札幌まで一熊に逢はなかった話— (*1)	p.6~11		
				小宮豊隆	科学者の人生観 寺田寅彦博士の『萬華鏡』を読む (*2)	p.17~18		
		3	12	吉村冬彦	言葉の不思議 (わらふとべらぼう)	p.14~16		
2	8	1	1	小宮豊隆	*2と同じ (2回目)	広告頁		
				尾野俱郎	北氷洋の氷の破れる音	p.10~12		
		2	2	吉村冬彦	藤の実	p.19~21		
				小宮豊隆	*2と同じ (3回目)	p.56~57		
				3	3		(休み)	
				4	4	吉村冬彦	言葉の不思議 二	p.14~16
		5	5	尾野俱郎	津浪と人間	p.8~11		
				吉村冬彦	岡田博士著「測候瑣談」(*3)	p.27~28		
				6	6	吉村冬彦	*3と同じ (2回目)	広告頁
				7	7	吉村冬彦	言葉の不思議 三	p.18~20
		8	8	8	吉村冬彦	言葉の不思議 四	p.28~30	
					辰野 隆	寺田博士の『柿の種』を読む (*4)	p.30	
					吉村冬彦	最近読んだ日本の良書愚書	p.51	
9	9	尾野俱郎	学問の自由	p.19~21				
		小宮豊隆	*2と同じ (4回目)	広告頁				
10	10	10	尾野俱郎	科学者とあたま	p.6~9			
			小宮豊隆	*2と同じ (5回目)	p.53~54			
			吉村冬彦	*3と同じ (3回目)	p.55~56			

(注釈)

- \*1) 全集第4巻の後記によると、随筆集『蒸発皿』に収録する際に副題を削除した。
- \*2) 『櫛』第65号に全文が掲載されている。大森一彦氏『人物書誌大系 36 寺田寅彦』によると初出は東京日日新聞(1929年9月30日)。『萬華鏡』は鐵塔書院刊(後に岩波書店刊)。昭和4年5月8日付け小宮豊隆宛ての手紙で、小林勇が批評文を頼んだことを詫びている。
- \*3) 全集第17巻の著作目録によると、同年4月16日、『時事新報』に掲載された「測候瑣談」の再録。全集第16巻に収録されているが、『鐵塔』に掲載されたという案内は無い。『鐵塔』掲載時に既に表題は変更されている。岡田武松『測候瑣談』は鐵塔書院刊(後に岩波書店刊)。
- \*4) 昭和8年6月19日、帝国大学新聞に掲載文の抄録。『柿の種』は小山書店刊。

リストを見ると、薄い雑誌であるためもあってか本文が宣伝も兼ねていたりして、良い作品を売り出していこうとする小林の狙いが分かるような気がする。

小林は寅彦全集の月報に多くの文を寄せているが、『鐵塔』関連の思い出もある。鐵塔が3号くらいの時、「藤の実」という原稿が届いて、お願いしていなかったので間違いだろうと確認に行

ったところ、「それは君に載せて貰いたくて送ったのだけれども、お気に召さなければ止むを得ないがよかったら載せてくれ給え」といわれ、その後も毎月原稿を送ってくれたり、手渡されたりしたと書いている。（「寺田先生三題」昭和 26 年 3 月 月報 11）

寅彦は脂の乗った時期であり、後からみても重要な代表作が並んでいる。特に筆名・尾野俱郎で書かれた作品は貴重である。

### 3. 「尾野俱郎」について

リストにある筆名の尾野俱郎について、寅彦は手紙の中で種明かししている。

昭和 8 年 10 月 10 日（火）小宮豊隆宛てハガキ

此頃は冬彦が虎の本性を少しづつ現して来ました、それが「尾野俱郎（ビアーグラ、梵語の虎）」の名を用いる時に一層そういう風になるようであります。鉄塔が休刊になって勝手なときに勝手な熱をふく場所がなくて淋しくなりました。

昭和 8 年 10 月 22 日（日）内田宗義宛て書簡〔封筒欠 年推定〕

鉄塔の廃刊は甚だ残念でありますがどうも損をしても出せとすすめる訳にも行かず甚だ淋しい訳であります。御尋ねの尾野俱郎は矢張少生の変名で鉄塔誌上だけに使用するつもりでしたが同誌の廃刊で死亡した事になります。

小林は先の「寺田先生三題」の中で「この署名で書かれたのはこの雑誌だけであり、且つ先生の随筆の中でも一種違った部類に入るものであった。或るとき大河内正敏博士に、露伴翁と先生が招待され、私も御相伴にあずかったことがある。ちょうどその日「鉄塔」の何号かが出たので持っていった。大河内博士が雑誌をパラパラと繰って「おや、寺田君、今月は君休んだのかい。」といった。先生はひどく嬉しそうに笑いながら私の顔を見た。「うん、今月は休んだんだ。」と答えた。二人だけが知っている秘密を楽しむようであった。それは、尾野俱郎の署名を最初に使った文章が載った時のことである。」と書いている。

また、昭和 7 年にソビエトの砕氷船が日本へ来た時、寅彦に無理に頼んで「僕は学者で随筆を書くのは道楽なのだから、問題を与えられて書いたことはいままでに一度もない。」と断られたにも関わらず、数日後「北氷洋の氷の破れる音」の原稿を速達で貰ったこともあった。

誠に、夏目漱石と岩波茂雄の関係が寅彦と小林に引き継がれているような、「ひとつの時代」であった。

（注）書簡は仮名遣いを一部修正しています。



『鉄塔』昭和 8 年 5 月号 表紙  
「津浪と人間」掲載